

# 城郭探訪

まちづくりと城の址

太田市 金山城

## 「難攻不落」金山城とまちづくり

太田市長(群馬県)

清水聖義



### 金山城の概要

太田市にある金山は標高約239mの低山であります。頂からは太田・新田地域だけでなく、広大な関東平野を一望することができます。『万葉集』の東歌に「いた

やま」として詠われるほど古くから畏れ敬われ、現在ではハイキングやトレイルランニングなどで市民に親しまれています。眺望絶佳の山、畏敬の山、そして、親しみの山である金山には、戦国期に「金山城」という山城がありました。

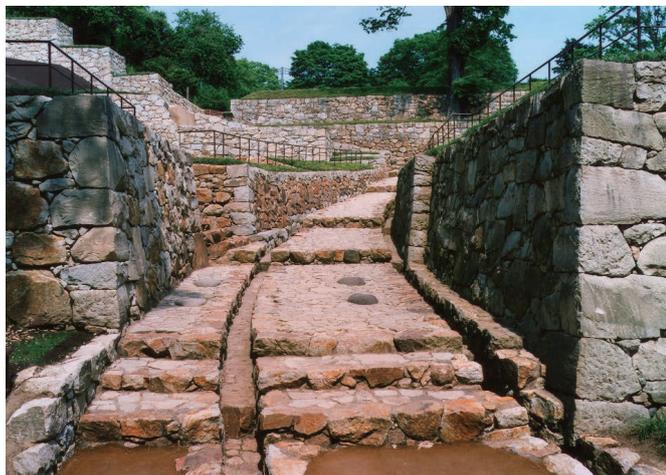
ました。

金山城は、敵の侵攻を食い止めるため、巧妙に仕掛けられた通路や岩盤を削って造った堀切、水を豊富にたたえた池や井戸、水害から城を守るための排水路など、城を守る工夫が随所に見られます。特に、東国



金山城跡が立地する金山(南から)

金山城は、新田義貞を輩出した新田氏の子孫である領主・岩松家純によって文明元(1469)年に築城されました。その後、下剋上により元家臣の横瀬氏(後の由良氏)が城を掌握しました。東国の統治者であった古河公方や、これに敵対する室町幕府方の関東管領、甲斐の武田氏や越後の上杉氏、相模の北条氏といった関東の覇権を争う戦国大名勢力のはざまにあって、金山城の歴代城主は形勢をうかがい、所属する陣営をくら替えして領地を守りました。敵対陣営からの攻撃も耐え抜き「難攻不落」を誇った金山城でしたが、最期は北条氏によって接収され、天正18(1590)年の小田原合戦で北条氏が敗北し廃城となり



石垣で守られた大手虎口(おおてこぐち)の通路(西から)



復元整備された金山城跡（南上空から）

金山は、江戸期には将軍に献上するマツタケの産地として幕府直轄領となり、その後、明治から昭和初期



水をたたえる日ノ池（北東から）

## 近世・近代の太田金山

ではまれな石垣を多く用いた戦国期山城として注目されています。

江戸期の太田は、日光参詣のための例幣使道太田宿（現在の本町通り）が置かれ、宿場町として栄えました。また、徳川家康によって大光院が開かれ、新田氏を先祖とあがめる徳川将軍家の手厚い庇護を受けました。

明治から昭和初期の太田は、東京から近く、気軽に楽しめる行楽地として大光院、藪塚鑛泉を中心になぎわつていました。また、大正期に飛行機研究所（現在の株式会社SUBARUの前身）が開業し、軍需工場のまちという一面を持つようになりますが、戦後は、自動車産業のまちとして飛躍的な発展を遂げました。

には、一部御料林として宮内省が管理しました。城の遺構がよく残されているのは、このように金山が嚴重に管理されていたことも要因の一つとされています。

## 現在の金山城跡とまちづくり

現在の太田市は、群馬県内で高崎市、前橋市に次ぐ第3位の人口規模となり、北関東随一の工業都市として、着実に発展してきました。

史跡金山城跡は、昭和9（1934）年に国史跡指定、平成14（2002）年に追加指

定を受け、山頂周辺で石垣復元などの史跡整備を行いました。また、平成21（2009）年に史跡金山城跡ガイダンス施設が金山南麓に開館し、金山城を含む金山の歴史や自然に関して情報発信をしています。さらに、財団法人日本城郭協会から日本百名城の一つに選定され、国内外から多くの人が訪れるようになりました。今後は、史跡金山城跡ほか市内文化財を有効活用し、地域への愛情や誇りを高めることで、にぎわいあるまちづくりを目指していきたいと考えています。

## 子育て呑龍

大光院は、金山城のある金山の南麓に位置する。義重山新田寺の山号のとおり、徳川家康が祖先の新田義重や同家代々の菩提を弔うために、慶長18年（1613）に建立した。もともと太田市は新田氏の本拠となつた新田荘に位置しており、古寺の遺跡のあつたこの場所が適地となつたのだという。そして、初代住職に選ばれたのが、江戸芝増上寺の観智国師の弟子呑龍だった。呑龍は、貧民の子どもを弟子として養育したと伝わり、「子育て呑龍」と親しまれた。文政3年（1820）版の『檀林巡路記』には、「開山堂龍公の靈験多しとして平日参詣群集す」とあり、没後200年を経てもその高德がしのばれていたことがわかる。さて、そのような呑龍だが、「子育て」の

異名の別の由来が、昭和9年の『金山太田誌』にあるので紹介したい。

元和2年（1616）のことだというから、大光院開山間もない頃のことだ。病気の父親の病を癒やそうとして、禁鳥のツルを捕らえた源治兵衛という孝行息子をかくまったのだという。幕吏が来ても頑として渡さない。そこで幕府では老中を通じて譴責したけれども効き目がなく、それどころか源治兵衛と共に寺を脱出して、信州小諸の山中に潜伏してしまつた。しかも、ただ雨露をしのぎ、草木で糊口をしのぐだけの凡人であるはずもなく、潜伏中は孝子源治兵衛の教化にも努めていた。こうした義侠心が世間の評判となり、ついに幕府も折れて罪が許され、再び大光院に戻って人々に慕われることとなつたという。